

## メキシコ・ラパス行き

木村 精二

**観測地** メキシコ国カリフォルニア半島南部、ラ・パス市ホテル・ロスアルコスの方の小高い丘の上、カナダ一家の住宅2階ベランダ。西の前方は、約1キロ先が海面で、左右ほぼ 100° にわたり水平線が天地を分けて見える。西経 110° 17' 北緯 24° 10'。

**機材** 双眼鏡 5cm×7; キャンオンF1, 28mm広角, コダクロム。

**同行者** 関 舜衛, 藤森賢一, ほか3名。

**概要** 日食の5日前の夜遅くラパスに到着。続く4日間は毎日、朝方は多少の雲があり、日中になると殆ど消失して、晴れないし快晴の天気が続いた。日中の炎天下は目が眩む暑さだが、乾燥しているため日蔭はまあまあの暑さ、朝夕は東京の春秋のような涼しさ。日食の当日は早朝に多少の雲が残ったが、第1接触に先立って消滅、「天文学最大のショウ」を快晴の好条件の下で迎えた。食分が6割を越すと、周囲の明るさの減少に先立って暑さが和らぎ始めた。80% ごろには金星が明るく東の中空に輝き出し、皆既10分前になるとむしろ涼しいくらい。その頃から西前方の海の色が濃く変わっていくのが認められたが、シャドウバンドは見えなかった。西空から本影椎が飛んでくるのも気付かず。高度80度の天頂近くで黒い太陽が、現地時11h47.7mから54.1m まで6分半近くにわたって続いた。白色のコロナの流線は太陽から放射状に十数本も広がり、特に東西方向の曲線は10R近くまで伸びた。月の北縁にはピンク色の明るく大きいプロミネンスが、皆既中ずっと見えていた。手元は時計の小さい針が認められる程度、空は日の入り30分ぐらいの明るさで、水・金・火・木の4惑星とレグルスなどの1等星が光った。灯台と集合住宅に明かりが灯った。皆既後もシャドウバンドには全く気付かなかった。一緒に陣取った藤森氏はカラースケッチの他フラッシュスベクトルと8ミリヴィデオなど、関氏は内部コロナの微細構造と外部コロナの撮影の他に8ミリヴィデオなどなど、多くの成果をあげられた。

**その他** 日食を機会にラ・パスで、米国ジェット推進研究所のエドベルグ氏らが組織した「アマチュア天文研究シンポジウム」(Symposium for Research Amateur Astronomy)が7月7日から開かれ、各地から天文家が約300人集まった。メインテーマは日食だが、口頭と展示による研究発表は天文全般にわたる巾の広いものであった。日本から富田弘一郎さんが展示発表をされた。日食の翌日は、カリフォルニア半島南端の1769年金星日面通過観測地を解説付で訪ねるバスツアーがセットされた。

筆者はこの会合に参加を申し込み(昼食、連絡バス代など含めて\$130), 展示会場で1970年メキシコ日食の纏め(B5, 93pp)などを希望者に配付した。また、予め同組織委員会の御世話で、同行者を合わせ6人が、現地の宿舎クーポン(上記の1級ホテル7泊で\$217)とロスアンゼルス・ラパス間の航空券(カリフォルニア航空の定期便往復で\$400)を入手した。あまりにもその料金が低廉なので学術ミーティングのための特別便宜かと思ったら、現地で、全く普通の料金である事がわかった。東京・ロスアンゼルス間は往復約14万円、1週間の食事はかなり贅沢して3万円程度、雑費を入れてメキシコへの9日間個人旅行を30万円足らずで済ませた。—— 今度の日食の主催旅行で、メキシコで50万円近くハワイでも40万円近かったのは、何かの間違いではありませんか!